

ずいそう



ウルルへ

加藤 晃



一昨年の5月、長い間行きたいと思っていたオーストラリアに家内と出かけた、目的はウルル登山と南十字星を見ることである。

ウルルは言うまでもなく世界第2位の一枚岩とされるエアーズロックの事で、以前には植民地の総督の名前からエアーズロック（Ayers Rock）と呼ばれていたが、近年、原住民のアボリジニの呼び名である“ウルル”が定着して久しい…とは言うものの昔人間の私にはエアーズロックの方が親しみを感じる。

エアーズロック空港到着後のカタ・ジュタ観光などで間近に見たウルルの第一印象は、どの方向から見ても取付きが急峻でとても登れそうにない山！と言ったものだった。

そして、翌朝8時頃にいよいよ登山口に到着。車内で「雨天は勿論、晴れていても風が強かったり気温が高すぎたりしたらウルル登山は禁止になるので、行っで見ないと登れるかどうか判らない」とガイドから聞かされていたが、幸い今日はゲートが開いていた。ただ、ゲート横に並んだ各国語で書かれた掲示板には登山の注意事項とともに「命を大切に」といった大きな表示があり驚かされた。

バスを降りると10数人が直ぐに露出した岩尾根の末端に取り付いて登り始めたが私達は集団からやや遅れて登る事とした。ところが、左手の手がかりになっていた最後の岩場、それは現地では「チキン（臆病者）ロック」と呼ばれていて、恐怖心のためそこから引き返す人が多い場所なのだが、そこで皆が固まっていたその先には若くて身軽そうな2人組だけが登り続けたのだった。

近寄って見るとチキンロックから固定の鎖が設置された場所までは何も手がかりがない露岩の急坂なので、その人達は恐ろしくて次の一步を踏み出せないでいたのだった。

私達はその場所で登って来た方を振り返って高度感を確認したり、靴底のグリップを確かめてから先行す

る二人を追いかけた。

ただ、その先は鎖が設置されているといっても平均40度、最大傾斜は46度とも言われるルートなのでバランスを崩せば下まで転落するのは明白で相当の恐怖心がこみ上げてきて、「ゆっくり、ゆっくり」と口に出し、一步一步を確かめながら登る事とした。

また、この鎖は太く重いのに加えて、低く垂れ下がっているので、支柱の真ん中辺りでは膝を曲げて特に姿勢を低くして歩かねばならず苦労する。

やっとの思いで到着した鎖場の最上部で暫く休憩し、一寸した段差を乗り越えてからは傾斜も緩く尾根もやや広くなってやっとな緊張感から解き放たれた。ふと横を見ると窪地の傍にペットボトルが危うげに引っかかっていて「あれを取りに行くのは命がけだな」などと思いつつ、テーブル状をなす頂上部の端に到達した。

そこからはほぼ水平で、傾斜した堆積層の侵食差により生じた大きな岩の凹凸を乗り越えたりしながら、白ペンキのラインをたどると、前方に頂上を示す方位盤が見えてきた。

何も視界を遮るものもない、文字通りの360度の地平線の展望を楽しんだ頂上からの下降は予想通り再び緊張感を強いられたが、思いのほかグリップが利くので登りの時に予想した程の恐怖感はなかった。

また、どうしても確かめたかった登山ルートは現地ツアーガイドに尋ねたり、遠くから双眼鏡で見たりして、改めて“良くあんな急勾配の岩山を登ったものだ！最初に登った人はどんなに危険を覚悟して登ったのだろう、アボリジニの人達が『聖地』として登らなかったのは尤もだ”と思った。（ウルルでは毎年1～2人が死亡すると言われている）

私達が登った前日は雨天、翌日は快晴だったが強風のため登山禁止という間で、天気にも恵まれて無事に登り、加えて念願の南十字星と満点の星空も見られて自然を満喫できた思い出深い旅行となった。

—— かつう あきら（元コマツ） ——



中央尾根の白線が登頂ルート